日本人のためのキリスト教神学

２００９年１０月１０日
西九州伝道所
佐々木正明

はじめに

プロテスタント･キリスト教が日本に入ってきて150年になりました。その間日本人は、もっぱら西欧キリスト教諸国で理解され、形成され、構築された神学に立った福音を聞かされてきました。それらの神学の中でも福音派の神学の多くは、聖書的な基盤をしっかりと持った信頼に値するものでした。とは言え、それを聞き、学ぶ多くの日本人にとっては何かおかしい、なんとなく合わない、どこか異質なものであり続けました。明治以降の為政者の多くも、進んだ西欧の諸科学を取り入れようとすると、どうしても一緒に入って来てしまう招かざる客、迷惑な宗教としてキリスト教を見ていました。和魂洋才は、敗戦後の短い一時期を除いては、日本の国是であり続けたのです。

そのような日本人の感覚に拍車を掛けたのが、ギリシヤ思考の流れの中に形成された、ヨーロッパ的キリスト教の神学、あるいは福音でした。ギリシヤ帝国はローマ帝国に滅ぼされたあと、再び世界を支配する力にはなりませんでしたが、その思想あるいは思考においては新たな支配者となったローマ帝国を支配し、ローマ帝国の軍事的支配と影響力に乗って、その後のヨーロッパの文化と思想を支配したのです。ローマ帝国の支配に乗って自らの力を拡大したキリスト教も、信仰としては自らのアイデンティティを残しながらも、決定的に本来のユダヤ思考を離れ、ギリシヤ思考に変化していきました。

私たち一般の伝道者たちも、ギリシヤ思考に支配されたヨーロッパで構築された神学を学びました。そしてそれに不審を抱きませんでした。明治以降の日本の教育は積極的に西欧の教育システムを取り入れていたために、私たちもギリシヤ的思考に慣らされていたのです。ときおり、神学として学ぶキリスト教と、聖書に読む天地創造の神に対する信仰とのあいだに、かすかな違和感を持つことがあったとしても、あえて取り上げるほどのものとは思われなかったのです。

しかし改めて考えてみると、イスラエル民族にご自分の御心をお示しになった、神の啓示と霊感による神学の形態というか、様態は、私たちが学んだ西欧神学、ギリシヤ思考によって構築された神学の様態とは、ずいぶんと異なったものなのです。そこにあるのは理性的な知識の集積としての神学、理論の構築としての神学ではなく、経験や体験から学び

取らせる神学なのです。そのイスラエル人たちの信仰表現の多くも、構築された神学の講義のようなものではなく、歴史記述であったり、詩歌であったりしたのです。

筆者が考えていることは、今、日本人がイスラエル民族のように経験や体験による神学に戻るべきだとか、歴史や詩歌を通して信仰を表現すべきだということではありません。仮にそれが必要になることはあったとしても、目的はそこにありません。ただ、もっと日本人のものの感じ方、考え方に沿った信仰の表現にすべきであり、日本人の感性に応じた神学の形態、あるいは伝達方法にすべきだということです。確かに現代の日本人は現代の教育を通して、決定的にギリシヤ思考にならされています。とは言え、日本人としてかなり共通性のある、非ギリシヤ的感覚、あるいは非ギリシヤ的思考を持っていると思うからです。ユダヤ人にあった信仰の表現と伝達方法があったならば、日本人にあった信仰の表現と伝達方法があると思うのです。

この日本人にあった信仰の表現と伝達方法こそ、いまの日本のキリスト教会に、決定的に必要とされていることに違いありません。ただしそれは、福音の日本化を目指すものではありません。あくまでも、普遍的福音の日本的な理解と表現です。とはいえ、ごくふつうの牧師に過ぎない筆者は、神学者のように深く追求して書くことはできません。ただ、思いつくことを列挙して、簡単に述べるにとどめ、後は思考力と表現力に優れた方の出現を待ちたいと思います。

Ｉ．日本人が感じてきた神

一般の日本人の、宗教意識のもっとも深いところにあるのは、すべての自然物の中に神の性質を感じる感覚、あるいは、すべての自然物の中に神が宿っていると感じる感覚と言えます。この感覚を理屈で表現したのが、いわゆる「汎神論」といわれるものです。

すべての自然物、ときとして人造物にまでおよぶこの感覚は、日本人だけではなく、世界中の多くの民族が共有するものですが、実際のところは、論といえるほど整ったものではありません。確かに日本人のこの汎神論的感覚は、特に顕著であると言えるかも知れません。日本人の曖昧な神観では、自然それ自体が大きな神であり、それぞれの自然物あるいは自然現象が、個々の格（神格？パーソン）を持った神であると感じたり、大きな神の部分的な顕現であると感じたりしているのです。そしてこれはあくまでも感覚であって、理屈ではないのです。

ですから日本人は、深山に入り込んでは、しっとりと湿った木陰に霊気を感じて祠を建て、大きな木々に感嘆して注連縄を張り、幽玄な光景に触れて鳥居を建てたくなります。目には見えず、五感には感じられなくても、そこには何か尊いお方、高いお方、聖いお方、強いお方、奥深いお方がおわしますと感じて、頭を垂れ、手を合わせるのです。普段は、ことさら何を願うのでも何を訴えるのでもなく、ただ、ありがたいと感じ尊敬の念を表す

のです。

多分、大多数の日本人は、周囲に人がいてもいなくても、食事の前には「いただきます」といってから、食べ始めます。この「いただきます」は誰に向かって言っているのでしょう。食事を作ってくださった方、食品を購入できるように働いて下さった方、作物を作ってくださった農家の方々、魚を捕まえてきてくださった漁師の方々にでしょうか。それも全くないではありませんが、むしろ、誰かはよく分かりませんが、この大自然を整えて、私たちが食べることができるように備え、私たちを生かして下さっている何かの力、単なる物理的な力ではなく、何等かの、人格的な性質を備えた力、目に見えず、手に触れることができず、口で説明することもできない人格的存在を感じて、うっすらと、なんとなく、しかし、拭うことができない感覚として、自分の存在に感じる神的存在を意識して、その存在者にたいして、「いただきます」と言っているのではないでしょうか。

そのような感覚はまた、容易に多神論に移行し、八百万の神々を作り出し、さらにはアニミズムの世界観を作り出し、おどろおどろとした怪奇な宗教感覚さえ生み出します。ルネサンスを経て一段と強められたギリシヤ思考が、啓蒙思想、理神論と流れていく中で形成されたプロテスタント神学では、一部の神秘主義的傾向の神学を除いては、このような日本人の宗教意識、あるいは宗教感覚というものを、低級なものと看做して受け入れることが出来ず、ただ侮蔑し排斥する一方でした。ですから、ギリシヤ的思考に支配された日本人は、自分のそのような感覚をうまく説明することができませんし、したいとも思いません。むしろ何となく、後ろめたい、恥ずかしい感覚と意識しながら、それでも、「いただきます」と言わないで食事をすることは、誰かに「無礼」であり「失礼であり」」感謝の気持ちが足りない」ことであり、「不敬である」と感じて、そっと「いただきます」と言うのです。

Ⅱ．神に似せて造られた人間

ところが聖書によると、人間は神に似せて造られています。ここが非常に重要な点です。霊であられる神に似せて造られた人間は、霊的な性質を持つものとして造られ、霊である神を霊的に認識できる本能を与えられているのです。人間は、本能として神を感じ、神を知ることができる感覚を持ち、神と交わりたいという願いを持っているのです。それこそが、人間を他のすべての動物と異なったものとしているものです。神を感じ神を求める感覚、宗教意識は、まさに人間が人間であることの本質なのです。この点をはっきりと認めなければ、私たちは、一般的西欧キリスト教が偶像礼拝を憎むあまり、人間本来の特性である宗教性の発露そのものまでを罪悪視するのと、同じ誤りに陥ってしまいます。

人間の宗教意識の発露そのものは、神に造られた人間の本能によるものであり、罪ではないことも理解しなければなりません。ただ、その宗教意識が表現されるとき、神の本当

の姿を忘れてしまった人々は、誤った神の姿を心に描き、間違った礼拝の仕方をしてしまうだけなのです。その誤った神の姿を描くこと、間違った礼拝の仕方をしてしまうことさえ、罪そのものではなく、かえって罪の結果なのです。

大食いをして腹を壊すのは、小さいとはいえ一つの罪です。それが習慣となって太りすぎになるのも、自分を制御できない罪です。しかし、食欲があり、食べたいと願い、食べ物を探すのは罪ではありません。間違って毒のある物を食べてしまったとしても、それは無知によるのであり、意図的におかす罪とは異なります。神でもないものを神として拝むことは、それ自体意図的な罪ではないのです。ただし、きちっとした食べ物があり、毒のあるものを食べてはならないと戒められ、毒のある食べ物の見分け方さえ教えられているのに、あえて毒のある物を食べるのは明らかな罪なのです。

Ⅲ.　おぼろげになってしまった神のイメージ

人間は神にそむく罪を犯して神のみ前から追放されてしまいました。神から隔絶された状態、神との交わりを絶たれた状態で生活を続けなければならなかった人間は、神のイメージを明瞭に保つことが出来ませんでした。世代が代わり歴史が流れるごとに、神についての知識は曖昧になり、感覚は薄れ、おぼろげにぼやけたものになってしまったのです。

それは日系三世や四世の人たちが、姿かたちは日本人なのにまったく日本語が話せず、日本の習慣も文化もすっかり失っているのと良く似ています。人間の宗教感覚は本能として与えられているために、たとえ確実な知識は失われてしまっても、神を感じ、認め、祀り、礼拝するという思いは、いつまでも失われることがなかったのです。世界中のどの地域のどんな民族でも、また歴史のどの時点でも、おおよそ人間である限り宗教的表現があったのは当然です。

Ⅳ.　偶像礼拝に寛容な神・十戒以前

これもまた非常に重要なことで､西欧周りのキリスト教の多くが見逃している点ですが、聖書の神は、偶像礼拝には非常に寛容な神だという事実を、認めなければなりません。西欧キリスト教は、キリスト教文化を前提に聖書を読み、イスラエル文化を背景に聖書を理解しようとします。その結果、自分たちは神の選民であるという強烈な意識が、イスラエル人の間に芽生えた後の文化と信仰様式のみに焦点を当て、まだ選民意識が生まれていなかったころの聖書の記述には、あまり関心を向けないままに来てしまいました。

そのために彼らは、選民とされた民族に、選民として生きることを教えた律法を、選民ではない人々、つまり異邦人にまで直接適用する間違いを犯してしまいました。モーセの十戒が与えられる前の、イスラエル民族（ヘブル民族といったほうが適切）の偶像問題に

対する神の取り扱いは、十戒以後のイスラエルに対する取り扱いとまったく異なっています。イスラエル民族が選民であるという事実は、創世記 12 章のアブラハムの召しにまで遡って考えられますが、イスラエル民族が選民である事をしっかりと意識するのは、モーセの律法が与えられてからのことなのです。

それは、十戒に代表される神の律法を、アブラハムやイサクやヤコブ、あるいはヨセフや青年時代のモーセに適用してはならないということを意味しています。

Ⅴ．偶像礼拝に寛容な神・異邦人に対して

また、異邦人の偶像礼拝に対する神の取り扱いも、まったく異なっています。一言で言えば、非常に寛容なのです。人々が他の神々を礼拝していても、イスラエル民族に対しての場合のように、直接神の怒りや刑罰の対象になることはなかったのです。彼らには律法が与えられていないからです。日本人は十戒を与えられたイスラエル人ではありません。律法を与えられた選民ではないのです。ですから、神の寛容な取り扱いの中にいるのです。パウロがアテネの人々に語った言葉が適用されるべきです。日本人はアテネの人々と同じように、「すこぶる宗教に熱心」なのです。

日本人は、何が食べることが出来るもので、何が毒なのか教えてもらっていない子どもが、おなかを空かしている状態に似ているのです。渋さにつばを吐き出し、えぐさに顔をしかめ、下痢に悩み、腹痛に苦しんでも、空腹のあまり、どうしても何かを食べないではおれないのです。日本人も、たとえ神についての知識を失って、何が神かは分からなくなってしまったとしても、神を求め、神に祈り、神を礼拝する本能は失っていないのです。

Ⅵ．汎神論の日本人

神を求める本能を持った日本人は、神から隔てられたままに独自の文化を形成し、独自の神意識を発展させてきました。それは、基本的に汎神論といわれる性質のものです。そして多くの日本人は、自分たちが汎神論的感覚を持っていることを、誇りにさえしています。たとえば、「日本人は汎神論だから、自然を神として敬い大切に守り続けてきたのだ。西欧人は自然を神の創造物として見て、自分たち人間はその自然を治めるものとして、立てられていると考えるために、自然を大切にせずに破壊してしまう」などという言い方を耳にします。どう聞いても、これは我田引水にすぎません。

欧米に比べても、日本人が自然を大切にしているとは思えません。列島改造論が盛んだった頃の自然破壊は、まさにけたたましいものでした。最近叫ばれるエコロジーも、日本発祥のものではありません。ただ自然を神とする日本人には、エコロジーは馴染みやすいところがあることだけはたしかです。世界のエコロジー運動を見ても、しばしば背後に汎

神論的性格が見え隠れします。

一般的に言って、たしかに日本人は自然を愛し、自分を自然の一部と認識し、その中にさえ神聖なものがあると思うのです。果たしてこのような感覚は、西欧キリスト教が言うほど愚かな宗教意識なのでしょうか。偶像礼拝であり、非難され、論駁され、排斥されるべきものなのでしょうか。そうではないはずです。日本人は、誰が神であるかを教えられていないために、汎神論的感覚に染まっているだけです。

自然が神の性質の反映であることは、これまでの西欧神学においても認めてきました。絵画でも陶器でも文学でも、芸術作品は作者の性質や性格や思いの表現です。作品には作者が現わされているのです。おなじように、自然物は神の作品であり、神の性質や性格、さらには力や能力が表現されているのです。詩篇の作者がうたったように「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」のです。それらの自然の中に、神の姿を認めるのはごくあたりまえであり、当然の事です。

Ⅶ．汎神論は低級な宗教感覚か

ところが新約聖書のパウロの表現を見ると、もう少し考え方を深めることが出来ます。パウロは神を、「すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものにうちにおられる、すべてのものの父なる」方と呼んでいます。（エペソ４：６）「すべてのものの上にあり」は、すべてのものを超越し、力においても権威においても栄光においても卓越しておられる方として、西欧神学でも充分に論じられてきました。「すべてのものの父」なる方も、西欧神学で充分に論じられてきました。しかし、「すべてのものを貫き」と「すべてのもののうちにおられる」という意味はあまり論じられたことがありません。

甦られた主イエスが、閂をされたドアを難なく通り抜けて弟子たちのところにおいでになったことがあります。これは手品でも奇術でもなく、甦りの体という、異なった次元の体をお取りになったイエス様だから出来たことです。ましてや、物質に捉われない霊であられる神を妨げるものはありません。神はすべてのものを貫いて存在しておられるのです。

私たちの神は純粋な霊ですから、どのような高密度な物質も、神を止めることができません。現在の私たちの理解では、私たちの周囲にある物質はみな、たとえどのように高密度であっても、すかすかのスポンジのようなものであり、それを何の妨げにもせずに貫き通してしまう物質があるそうです。超新星の爆発や恒星の核融合によって放出されるニュートリノという物質は、地球さえ難なく貫き通してしまいます。ましてや神は、超新星の爆発の後に残されたブラックホールの核の部分にある、超過密物質、つまりあまりにも密度が高くそれだけ重く引力が強いために、光さえ引き込まれて閉じ込められてしまうほどの超過密物質さえ、1 立方センチで何兆トンあるいはさらに重いかも知れない物質を、何の妨げにもせずに貫いて、自由に通り行き来しておられるのです。

ですから神は、「すべてのもののうちにおられる」と言われているように、すべてのものの中に内在もしておられるのです。これは、クリスチャンのうちに住んでおられるという意味の内在とは意味が違うものです。クリスチャンのうちに住む、あるいは神殿の中に住むといわれる場合は、特別の親しさを意味しているのであって、そこに存在しているという意味とは違うからです。臨在という意味も同じです。神の臨在のないところには神が存在しないという意味ではないのです。存在という意味では、まさにありとあらゆるものの中に、神は常に存在しておられるのです。神が存在していない場所、所、次元などはあり得ないのです。地球を貫く物質があるのですから、神は地球をも貫いてその真ん中にも存在しておられます。

神は霊であり、初めに天と地を創造してくださった方ですから、時間と空間と物質というものを超越して存在する方です。神の存在の次元は、私たちの三次元の世界を超えた次元です。その神がお造りになった三次元の世界は、たとえどれほど大きく広がる宇宙であっても、わずか一つの次元に過ぎないのです。もっともっと他の次元が存在するのです。それは聖書の記述を見れば明らかです。神だけの次元があり、天使たちの次元があり、悪魔や悪霊たちの次元があり、死後の世界といわれる次元があり、その中にもどうやらアブラハムの懐と呼ばれる善人が行く次元があり、悪人が行く次元もあります。アブラハムの懐と呼ばれる次元がパラダイスと呼ばれる次元かどうかは確実なことはいえません。さらに甦って再臨のキリストに携え上げられる次元があり、ずっと時代が進むと、悪魔や悪霊に従う者たちが閉じ込められる次元があり、さらに彼らが最終的に刑罰を受ける次元があり、新天新地の次元があります。厳密に調べるならば、さらに別の次元が考えられることでしょう。

私たちの神はこのように次元を超越して存在される方ですから、神のいない場所を想定することがおかしいのです。神が天と地と呼ばれる宇宙をお造りになったときでさえ、ご自分の外側に宇宙をお造りになったのではなく、内側にお造りになったのです。神は宇宙の外側にいるのではなく、宇宙の内側にいるのでもないのです。神は宇宙より遥かに大きく、宇宙をご自分の中に収めておられるのです。私たちが家を作るとき、わたしたちは自分の外に、対象物として、自分より大きな家を作ります。そしてその中に出入りします。しかし、神が宇宙をお造りになったとき、神はご自分のうちに宇宙を造り、その宇宙全体に満ちておられるのです。

神は、木の中にも石の中にも、水の中にも、山の中にも、花の中にも、穀物の中にも存在しておられます。太陽や月や星の中にも神は存在しておられます。そしてそれらを超え、それらを支配し、それらを包み込んで存在しておられます。日本人が木や岩や山などの自然物の中に、神を認めるのは間違いではないのです。万物は神の存在を表しているのです。存在するすべてのものの中に、神はいらっしゃるのです。神のいらっしゃらないところは、存在しないのです。パウロがギリシヤ人の言葉を引用して語ったように、「私たちは神の中に生き、動き、また存在しているのです」（使途 17：28）

日本人が万物を神として崇めるのは、確かに間違いであり、愚かなことです。しかし、啓蒙思想に流され、理神論的になりかけていた西欧神学が教える神よりは、間違いが小さいとさえ言えそうです。日本的な汎神論は、西欧プロテスタントの神学が言っているほど低級な神意識ではなく、かなり真に迫った神意識であるといえるのです。万物の中に神聖なもの、あるいは「神」を認めるのは、聖書が教える神観念に非常に近いのです。またそれを恐れ敬い感謝を捧げるのは、聖書が教える本来の神礼拝にさほど遠くはないのです。

Ⅷ. 自然をお造りになった神

日本人の素朴な信仰心は、すべての自然物の中に神の存在を認めてきました。ところが自然物そのものを神とする感覚とは､必ずしも一致しません｡自然は神を宿してはいても、神そのものではないと感じている人が多いのです。聖書の示す神観によっても、自然は神の中に存在し、神は自然の中に存在しているとは言えるのですが、自然は神であるとも神は自然であるともいえないのです。

面白いことに、日本人の宗教意識の中には、創造神という感覚はあまりありません。存在物には創造者がいるはずだという理論的思いはあまり発達せず、神性を内に秘めた自然物が、はじめから存在していたと感じているのです。日本人は、昔から非常に実利主義的傾向が強かった民族です。あくまでも、自分たちに利益をもたらすものを大切にして来ました。ですから、自分たちの現在の生活にほとんど関わりを持たない、誰が天地とその中の物を造ったかなどという大昔の出来事、すなわち形而上学の問題には、あまり頓着しませんでした。いま自分が生きている周囲の事象、花鳥風月のほうがよほど大切であり、いまあるものとの関係の中の神のほうがもっと重要だったのです。

一方西欧の神学では、すべてを超絶した天地創造の神という形而上学的な問題を、大きく取り扱いました。日本に遣ってきた宣教師たちも彼らに指導された日本人たちも、そのような感覚で、日本人に神を教え、キリスト教信仰を紹介しようとしたのです。でも、聖書自体は神を形而上学的には論じていないのです。確かに、神が天地を創造された方であるという事実は、幾度も強調していますが、それはあくまでも形而上学の問題としてではなく、今生きている人間に関心を持ち、祝福し、救い、助け、導こうとしておられる神が、一体どのような神であるかを教えているだけなのです。その神は、周辺の諸民族が礼拝し恐れているような小さな神々ではなく、どんな苦境からも人間を助け出すことができる力強い神であること、天地を創造した全知全能の神であり、信頼に足る神であることを示したわけです。

神は聖書を通して、あなた方の神である私は天地を創造した大きく力強い神であり、あなた方をも創造した神なのだから、この私だけを礼拝し、あなた方の人生を任せなさいとお語りになっているのです。天地創造の物語は、天地創造の経緯や順番や科学的事実を伝

えようとしたものではなく、私たちが礼拝する神は、私たち礼拝するにふさわしく、私たちが信頼するに足る神である事を明らかにしているのです。

平田篤胤は、ご法度を破ってバテレンの書物に学び、キリスト教神学に似せた神学を建て、復古神道の基礎を据えた人物です。それが後に明治政府に取り入れられて、天皇制の基盤となり、現人神につながり、軍国主義になだれ込んでいったのは歴史が示すとおりです。平田は天御中主神（アメノミナカヌシノカミ）を創造主と見立てました。ただしこの神は人間とはほとんど関係を持たず、出る幕も少ない、あたかも理神論の神のように理屈上存在しなければならないから、存在させられているだけの神になってしまいました。

天皇制や軍国主義とはあまり関わりのない、一般的な日本人の素朴な神道の感覚としては、むしろ自然も神も、元の元から存在していたものと捉えられているように思えます。この神は四季を与え、緑を育み、作物を育て、人間に幸せを与える「尊き方」として、感謝と賛美と礼拝の対象となっていると同時に、雷を起こし、嵐をもたらし、天変地異をもって怒りを表す恐れの対象ともなっていました。

一方では、神を敬い感謝と賛美と礼拝を捧げながら、他方では、恐れ慄いて近づきがたいと感じて犠牲を携えていくのは、ほとんどすべての民族宗教に共通な、本能的なものだと言えそうです。それは、人間が神に似せて創造されながら、罪を犯して神から隔絶されてしまったという聖書の記述、あるいは絶対に聖い神に罪ある人間が近づくには、犠牲を携えていかなければならないという、聖書の定めからも容易に説明できるものです。

また、日本人が創造主と創造物の間にあまり隔たりを置かずに見ているのも、今まで論じてきた観点からすると、一つの見方であり、あながちことごとく否定されるべきものではありません。万物はまさに神の中に存在を許されているのです。自然界は神の中にあり、神は自然界の中におられるのです。西欧の神学が、すべての存在物を神の外に置き、神に相対する存在として考えてきたのに比べると、むしろ聖書的とさえ言えそうです。

天地創造の神は、ご自分の内に天地をお造りになったのです。神より大きく深く広く高い、そしていくつもの次元を超えて存在しておられるものは、存在しないのです。私たち人間は、その大きな神、空間と物質と時間とを超えていながら、空間と時間と物資の世界に人間を造り、生かしてくださっている神を礼拝するのです。聖書はこの小さな人間の救いを取り扱う書物です。神はこの小さな人間を神のみ姿に似せ、神を感じることができるように造り、それゆえにこれをいとおしみ、これに幸せと喜びを与えようとなさったのです。

聖書は神と人間の関係を説き、神の救いを明らかにしている書物です。人間の救いと関係のない物語は、聖書には触れられていないのです。アンモナイトの時代も三葉虫の時代も恐竜の時代もマンモスの時代も、聖書は無視しています。聖書は地球の歴史を語る本ではなく、人間の救いを取り扱う本だからです。宇宙の広さや光の速さ、太陽系以外の恒星

と惑星、天の川とさらに多くの銀河、拡大しつつある宇宙などにも無頓着です。人間の救いに関わりが無いからです。他の天体にはまだまだいろいろな生物がいると言われ、人類のような高等生物も存在する可能性があるとさえ言われていますが、聖書はそのようなことにも一切沈黙しています。私たち人類の救いには縁遠い話だからです。でも、人類の救いに少しばかり関わっている、天使たちの世界、あるいは悪霊たちの次元については、わずかだけ、覗き見ができる程度に見せてくれています。

私たちは、すべての自然物に神の姿を見ようとする日本古来の神道を、ただ低級で未発達な宗教という西洋感覚のレッテルを張らず、もっと公平に見たいものです。汎神論や多神論を低級な宗教と見るのは、聖書の教えというより、むしろ、啓蒙主義の影響、進化論に根ざした考え方によるものといえるでしょう。宗教も、低級な神意識から段々と高度な神観念に進化発達するものだというわけです。もちろん、日本の神道には間違いがあります。でも低級な宗教ではないのです。

そういうわけで私たちは、日本人が自然を神として崇拝するときには、それらを毛嫌いし、偶像礼拝だと断定し、罪だと糾弾するのではなく、彼らと一緒に礼拝しながら、自然ではなく、自然をお造りになり、自然の中においでになる神を礼拝すればよいのです。一緒に礼拝しながら、自然を拝み自然と渾然一体となっている神を崇めている日本人に、自然の中にもおいでになる神様は、実は自然をお造りになって自然の中におられる神、自然を支配しておられる神である事をお話すればよいのです。

自然の中にいらっしゃる神を積極的に認めて、その神を礼拝するように励ますのです。日本人が、木を神とし、海を神とし、山を神とするとき、私たちは、木の中にも海の中にも、山の中にも神がおいでになることを語り、その神は木を造り、海を造り、山をお造りになった神である事を語り､自然物をもって私たちを祝福していてくださる神である事を、優しく伝えればいいのです。しかも、木の中におられる神も、海の中におられる神も、山の中におられる神も、異なった神々ではなく、実はお一人の神が様々な姿を見せていてくださるのだと、諭してあげればよいのです。

日本人の神意識の幼稚さ、低級さ、間違いを指摘し軽蔑し、敵視し、罪悪視し、会話を閉ざしてしまうのではなく、神から隔絶されて、神についての正しい知識を失ってしまった人類の中で、かなり正しい神意識に近いものを持ち続けている日本人に、敬意を表しながら会話を続け、共に住むことが大切なのです。

Ⅸ．自然を通して自己啓示をされる神

私たちの神は自然を造り、自然をご自分の中に収め、自然を支配し、また自然の中におられる神ですが、それだけでなく、自然を通してご自分を現してくださる神です。ダビデは歌いました。

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。
昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ知識を示す。
話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。
しかしその呼び声は全地に響き渡り、
そのことばは、地の果てにまで届いた。　　　（詩篇 19：1～4）

神の万物の創造が、何を目的としていたのか、詳しくは分かりません。神が人間をお造りになった目的も、説明しきることはできません。まさに、「神のみ心は神の御霊のほかに誰も知らない」のです。（Ⅰコリント 2：11）ただ、その究極の目的は、神の栄光を現すためであるということは知っています。（エペソ 1：14）でも、神の栄光を現すとは、どういうことなのかさえも、しかとは分からないのです。

私たちは、自然が神のみ手の業を示すものであることについて、もう少し敏感になるべきだと思います。西欧のプロテスタント神学では、救済論に重点が置かれてきたために、神の啓示についても、救いに関する啓示のみに強調が置かれ、いわゆる自然を通しての啓示にはあまり関心が払われなかっただけでなく、かえって否定的に取り扱われてきました。

確かにパウロは、「知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神はこの世の知恵を愚かなものとされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」と語って、自然啓示を通しての神理解を、十字架のことばすなわち救済に関わる啓示と対比し、自然啓示によっては、人間は救いの知識に至らないと主張しています。（Ⅰコリント 1：17～21）

ところがその同じパウロが、ローマ書においては異邦人の間違った信仰に言い及んで、次のように語っています。「なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかだからです。それは神が明らかにされたのです。神の見えない本性、永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められ・・・・・。彼らは神を知っていながら神としてあがめず、感謝もせず・・・・・」（ローマ書 1：19～23）パウロは、たとえ自然啓示によって、人間は救いに至る知識を得ることはできないとしても、基本的な神の知識には至ることができたはずだと言っているのです。

パウロによると、救いに至る知識を持っていなかったことが、異邦人の罪だったのではありません。被造物、すなわち自然を通して神の本性を知ることができたはずなのに、それを知ろうとせず、神の不滅の栄光を、滅び行く人間や、獣や鳥、這うものの形に似たものに変えてしまったことが、異邦人の罪でした。その罪のゆえに、神は異邦人を恥ずべき心の欲情に引き渡してしまわれたのです。

西欧プロテスタント神学は、カトリックとの戦いの中で形成され、救済論に重点が置か

れたために、この自然啓示の大切さ、重要さを見落としてきました。しかし、キリスト教の背景を持っていない日本人に大切なのは、キリスト教の神を知らない人に対する神学です。キリスト教の背景を持ち、たとえ誤りが多くおぼろげであったとしても、旧約聖書と新約聖書を通して啓示された、神についての知識を持っている人たちに対する神学では、充分に対応することができないのです。したがって、パウロが語る可能性、つまり、人間は自然の啓示を通してでも、基本的な神理解に到達できるという事実を、もっと真剣に考えなければならないのです。

ローマ書１章のパウロの記述を読んで、日本古来の神道、日本人の素朴な神意識の表現である神道を考えると､パウロの言うことに当てはまらないところがあるのに気付きます。それは、日本の古来の神道には偶像がないことです。パウロが激しく非難してやまない愚かな宗教行動である偶像礼拝、不滅の神の栄光を朽ちるべき人間や獣や鳥や這うものに似せてしまう偶像礼拝が、日本人の魂の故郷と言われる神道には欠けているのです。もちろん、仏教が伝来し、その影響を受けた後には、神道にも偶像礼拝が入り込みましたが、本来の神道には偶像礼拝がほとんど見られず、今でも純粋な神道には偶像がないのです。ご神体といわれるものも、存在はしますが、それすらも偶像そのものではなく、ちょうどイスラエルの契約の箱や聖所のように、神とその臨在を象徴するもの、あるいは依代（よりしろ）に過ぎないのです。

西欧から来た宣教師たちは、神道を見て、直ちに異教、偶像礼拝と見做して敵対行動を取りましたが、パウロの言うところをきちっと理解し、神道の本質を学んでいたならば、もう少し異なった行動をとることができたはずです。かつてアフリカで宣教師をしていた日本人牧師に聞いたことがあります｡アフリカの偶像礼拝と言われるものの多くも､実は、西欧の宣教師たちがそのようなレッテルを貼り付けただけで、実際は、偶像礼拝と異なるものだということでした。

少なくても日本人は、不滅の神の栄光の姿を朽ち果てるものに変えてしまうことはありませんでした。その理解は不充分で間違いもたくさんあります。神から隔絶されていたのですから、至極当然なことです。しかし日本人は、聖書の時代のイスラエルの周辺民族のように、人や獣や鳥や這うものに似せて作られた神々を、拝んでいたのではないのです。ただその理解がはなはだ曖昧なために、容易に仏像の神々しい煌びやかさに驚いて、それに惹かれてしまうところもありました。様々な宗教の影響を受けて、ご神体を作り偶像として拝んだ場合もありました。それでも、日本人の魂の故郷である神道の中心は、偶像を持たない形で継承されてきたのです。

パウロによると、人間が朽ちない神の栄光を朽ちる被造物に似せて、偶像礼拝を行ったために、神は人間を心の欲情のままにお任せになりました。あらゆる罪がそこから酷くはびこるようになったというのです。日本という国にも、罪は広くはびこりました。犯罪は社会を腐敗させて来ました。しかし、多くの国々に比べると、日本は非常に犯罪の少ない平穏な社会です。日本人の道徳心の高さは、西欧のどのようなキリスト教国にも劣りませ

ん。大変不思議なことです。西欧キリスト教諸国は、聖書の教えがあり、教会があり、クリスチャンたちがたくさんいても、あの程度のところに留まっているのです。

日本にはキリスト教の背景がありません。教会もクリスチャンの力も微々たるものです。ところが、日本は非常に高い倫理性を保っているのです。驚いたことに、ある有名な国際的調査機関の調査によると、日本人の６０％以上がクリスチャンだというのです。この調査機関は、日本の人口の何%がクリスチャンであるかではなく、日本人という個人の生活と、それらの個人が作り出す日本社会が、どれだけ聖書の教えに近いものであるかを調査したのだそうです。すると日本人と日本社会は、ドイツよりも高い基準で、聖書的だというのです。

私たちは、聖書の神を知らない日本人に対して、聖書の神を知らない人に対する神学をもって、接していかなければならないはずです。

X．日本人に必要な神学

私たち牧師は、知らず知らずのうちにとても西欧的感覚の人間になっています。そんなことを言うと、「俺は日本人だ！」「日本人である事を誇りとしている！」という牧師も少なくないと思うのですが、それは、自分がどれほど西欧的感覚に陥っているか、気付かずにいるだけのことだと思うのです。

明治以後の日本は、西欧に追いつき追い越せで、あらゆる物を西欧から学んできました。産業、技術、学術、政治、芸術、医学など、おおよそ思いつくものすべてが、西欧に学んだものです。子どもであった私たちは、西欧から取り入れられた教育システムで育てられ、西欧的であることに違和感を持たないまでになったのです。

ところが一般社会では、明治以降の国是となった和魂洋才が、これまた徹底していたのです。つまり、西欧の進んだ産業、技術、学術などはどんどん取り入れるけれど、西欧の精神であるキリスト教は徹底的に排除し、日本古来の精神、大和魂をもってこれに代えることにしたのです。西欧の先進的な要素はすべて取り入れても、その精神となったキリスト教は、多くの国を植民地として他民族を滅亡させていく恐ろしい宗教、あるいは野蛮な精神文化としてこれを退けたのです。それでいながら、やはり西欧におけるキリスト教のように、民族の精神的柱になりうるものが日本にも必要だと考え、平田篤胤などによって提唱された復古神道を採用し、これを国家神道にまで高揚して大和魂としたのです。

したがって、ふつうの日本人は産業技術や学問の分野では徹底的に西欧化しながら、その精神文化においては、反西欧主義なのですが、牧師たちは、その反西欧主義を乗り越えてクリスチャンになることができた、数少ない「西欧志向」の日本人だったのです。そして牧師たちは、西欧文化の中で長い間かけて構築されたキリスト教神学、あるいはキリス

ト教文化を、一種の憧れを持って学び、吸収してきました。もともと、小学生のときから西欧的な教育システムの中で学んできたのですから、西欧志向を持ってキリスト教を受け入れてしまうと、その西欧化の急流を妨げるものは少なくなってしまいます。

ですから牧師たちは、自分たちが学んだ神学が西欧で構築されたものだという事実に頓着することなく、あるいはほとんど違和感を持つこともなく、そのまま習得し、それをもって日本人の伝道牧会に当たってきたのです。これでは、日本人にキリスト教を理解させることは難しく、日本人がクリスチャンになることも容易ではなくなるはずです。

西欧のプロテスタント神学、あるいはいわゆる聖書に根ざしたといわれる神学は、カトリックの神学への反発として発展したという宿命を背負っています。カトリックの間違いを聖書から正し、そこから聖書の理解をさらに深めて行ったわけです。ほとんどすべての人たちが、天地を創造した神の存在を認め、神の権威、神の力、神の救いなどを前提とした精神環境の中で、聖書を理解し、「自分たちに有益な」神学を建てて行ったのです。私たち日本人とはまったく異なって、すでにある程度聖書的な宗教観、世界観、神観をもった人たちの「ための神学」が作られたのです。神学というものは、たとえ聖書神学と名のつく神学でも、純粋に学問的公平性を保つものではありません。かならず、その神学を発展させた人の文化的背景、あるいはその人の住む社会の必要性によって影響を受けるものです。

たとえば、聖書の中には一夫一婦制が原則として謳われていますが、一夫多妻の問題が大きく表面化しなければ、その原則は取り上げられず、理解もされませんでした。男女平等にしても奴隷制度にしても同じです。あるいは、私たちペンテコステ教会ではいまあたり前になっている、聖霊に対する強い関心も理解も、宗教改革以来数百年間ほとんど皆無だったのです。ちなみに、歴史上もっとも優れた信仰告白と言われる、使徒信条を唱えて見てください。そこには聖霊という言葉こそ二度出てきますが、聖霊そのものについては、実質的には何も語られていません。人々が聖霊に関心を持たなかったために、聖霊の神学は発展も構築もされなかったわけです。

西欧「キリスト教諸国」で発展したプロテスタント神学では、カトリックとの争いの中で、聖書の権威が高揚され、救済論に大きな力が注がれたのは当然です。それが彼らの必要性、彼らの社会の必要に合致したからです。ところが、いま私たちはまったく別の世界に住んでいます。まったく別の必要を抱えています。精神文化も知的文化も違います。たとえ産業や技術をはじめとする、「物」の文化では多くの共通性をもち、自由経済主義を基本として理解しあえたとしても、形而上の問題、つまり、精神とか心、あるいは神とか宗教とか礼拝という事柄については、まったく異なった土壌に生きているのです。

西欧のキリスト教神学は、神の存在に疑いを持つ人がほとんどいない中、山の神を拝んだり、海の神を祀ったり、牛の神に頭を下げたり、猫の神に供物を備えたり、果てはネズミの神を恐れたりする人々もいない中で、構築された神学です。自然を神としたり、自然

物の中に神が宿っていると考えたりする神観、あるいは世界観の人たちのために考えられ、発展させられた神学でもありません。キリストのことなどまったく知らない人々の必要と、そのような人々ばかりが住む世界の必要のために、深められた神学ではないのです。

これを理解しないままで、牧師たちが一所懸命に聖書を用いて西欧神学を説明しても、あるいは西欧神学を道具として聖書を説いたところで、日本人は理解しないのです。理解することができないのです。ただ、はなはだ異質のものとして、拒絶反応を持ってしまうのがおちです。日本人に必要なのは、救済論的な神学、あるいはキリスト論的な神学、言うならば、「神学の木」の花や実ではなく、神論という「神学の根」を取り扱ったもの、キリスト教の教えを知らない人とも、ある程度の共通理解あるいは共通意識を持ちながら、話していける分かりやすい神学です。しかもただやたらに、「偶像礼拝偶像礼拝」と騒ぎ立てる子犬のような、ひとりよがりに異教徒を見下した西欧神学ではなく、もっと深く聖書に根ざした、異邦人に対する公平な神学なのです。

ＸＩ．キリスト論から神論へ

西欧プロテスタント神学の特徴は、キリストとその贖いの働き、そして、信仰による救いを中心にしていることです。ルターがカトリックの誤りに対して抗議の声を上げたのが、その点であり、それこそ当時の西欧社会の宗教事情の中で、もっとも必要とされていたことだからです。

当時の西欧の人々は、天地創造の神を信じていました。教会は、社会の中でも人々の心の中でも、重要な地位を占めていました。キリストはすべての人々に知られていて、不正確ではあっても人々は罪の自覚を持っており、死後の世界の存在も信じていました。だからこそ罪の刑罰を恐れ、熱心に救いを求めていたのです。現在の日本に比べると、若年の死亡率が圧倒的に高く、いつも死と隣り合わせに住んでいたと言っても過言ではなかった、当時の大衆にすれば、神はどのようにして救いを準備してくださったのか、いかにすればその救いを獲得することができるかが、切実で緊急な問題となったのです。だからこそ、それらをこと細かく説明する神学が構築されたわけです。

ところが日本では、天地創造の神を信じている人などほとんどいません。キリストについていくらかでも知っている人など、よほど奇特です。罪の自覚を持っている人はとても少なく、死後の世界の存在にも懐疑的で、救いを求めている人などさらに希少です。そこに、西欧プロテスタントのキリストとその働きに中心が置かれた、救済論的神学が持ち込まれ、その神学に沿った伝道牧会がされたとしても、日本人には「どこ吹く風」の話です。

さらに、日本人の多くはキリスト教と聞いただけで、外国の宗教だと言って自分の関心の外に置いてしまいます。国際感覚を強く身につけた都会の人たち、あるいは高学歴の人たちの間では、キリスト教を外国の宗教だと言うようなことは少ないでしょう。でも彼ら

とて、ひとたび故郷に帰り、家族親族と親しく付き合い、地域社会に入って円滑に生活しようとすると、キリスト教を「よそ者の宗教」と判断しなければならなくなるのです。日本では、キリストという言葉を用いて伝道するのは、それだけで困難だということです。

もちろん、キリストとその働きを中心とした神学が、無用だと言っているのではありません。それはプロテスタント教会の尊い宝です。しかし、日本のような土地で伝道しようとするならば、その神学を振りかざしていては無理だということです。もっと日本人になじみ深い、共通意識から始めるべきです。その共通意識とは神です。神はすべての人間の中にある、本能的な意識です。神意識の無い民族は存在しません。神が人間をお造りになったときに、神に似せて造ってくださったのです。それは神を感じ、神を崇める欲求を持つということです。キリストには無関心な日本人も、神には関心があるのです。無宗教を自認して止まない日本人も、本当はしっかりと神意識を持った人間なのです。そして、それぞれの方法で神を感じ、それぞれの方法で、神を崇め、それぞれの方法で宗教的欲求を満たそうとしているのです。

ところが西欧プロテスタントの神学を背景とした伝道は、まず、日本人の神意識を非難するところから始まります。低級な神意識、間違いだらけの宗教感覚、発展していない幼稚な神観、迷信だらけの神話、そして国粋主義に利用された国家神道というわけです。プロテスタントの伝道は、日本人の感覚には不在の「キリスト」から始まり、せっかくの共通意識の「神」については、非難と攻撃から始まるのです。それでは会話が成り立たず、心の交流も不可能であり、信頼も、理解も期待できません。だから、伝道はうまく行かないということです。

私たちは、日本人の神観を見下したり非難したりする、一方的で独断的な西欧キリスト教神学を、ひとたび横に降ろして、もう少し注意深く聖書を学びなおし、「非キリスト教徒の神学」を構築すべきです。つまり、クリスチャンでない人々の神観について、学びなおすべきです。確かに聖書は、キリストとその贖いの働きを中心とした書物であると言えるでしょう。でも、もっともっと幅の広い書物でもあるのです。

旧約聖書は、イスラエル民族に救い主の出現を予告する書物でした。新約聖書はその救い主の到来を告げ、救いの実現と完成を語るものです。聖書そのものの大部分が、創造主である神の実在を当然の前提として書かれています。その上で、救い主の出現が予告され、その予告がイエスというひとりの人物の出現によって現実となり、出現したイエスの救いの働きが述べられ、さらに人が救いを得るにはいかにすべきかが記されているのです。救済論的観方を持たないで聖書を読むことは間違っているのです。ですから、西欧プロテスタント神学が救済論的であることに、誤りがあるわけではありません。

ところが聖書の中には、そのような創造主である神の存在を、前提としない人々の信仰についても書かれています。キリストはおろか、神の概念さえもはなはだ曖昧で、ちょうど、いまの日本人のような人々です。旧約聖書では、モーセによって出エジプトをする前

のイスラエル人たちです。新約聖書では、パウロが宣教したグレコローマンの人々です。

旧約聖書の律法は、神の大きな奇跡を次々と見せられ、信じられないような救いも体験し、苦難の中から救い出された経験を持つ、イスラエル人に与えられたものです。紅海を渡る前のイスラエル人に与えられたのではありません。紅海を渡る前のイスラエル人の神意識は、わずかな人々を除いては、とてもおぼろげで、はっきりしないものでした。

偉大な指導者モーセでさえ、かなり不明瞭な神意識しか持っていなかったのです。アブラハム、イサク、ヤコブの神を信じていたとはいえ、ではその神がどのような神であるかとなると、かなり怪しいのです。彼は後になって明確な神体験をして、啓示によって律法を書いていますが、その律法によっては絶対に許されない、ミデアン人という異邦人の、しかも祭司の娘と結婚しています。だから彼には、燃える柴の体験、神との対面という、恐ろしくも神々しい体験が必要だったのです。その時まで、彼は明確な神理解を持っていなかったからです。

そのモーセが、後になって創世記を書いたとき、彼は大きな問題に遭遇しました。言い換えると、神はモーセを用いて創世記を書かせられたとき、大きな問題に遭遇しました。神のことをよく知らない人々、非常に曖昧な神理解しか持っていないイスラエルの人々、たとえ大きな奇跡を次々に見、紅海の奇跡を体験し、神の救いを経験していたとしても、神の理解としてはまだまだ幼稚であったイスラエルの人々に、どのように神を紹介するかということです。

そのために、つまり神の紹介、あるいは神の自己紹介のために、創世記の天地創造の物語が用いられたのです。天地創造の物語は、天地創造の経緯や順番や、科学的事実を間違いなく記そうとしたものではありません。科学の知識も物理の知識もまったく不必要な時代の人々、そのようなことにはおおよそ無関心な人々に、あなたたちの神は、周囲のあらゆる神々、すなわち太陽の神、月の神、海の神、川の神、山の神、鰐の神、牛の神、鷲の神、猫の神、蛙の神などとはまったく異なる、大きな神、力強い神、天地創造の神であるという事実を教えるために書かれたのです。

しかし、その天地創造の神を紹介する物語を書くにあたっても、大きな困難がありました。「神」という言葉をどうするかです。誰も、天地創造の神を知らないのです。神々という概念はありました。小さな神がたくさんありました。でも人々は、天と地を創造された、全知全能の神という存在を知らず、それに近い概念さえ持っていなかったらしいのです。ですから、そのような神を表現する適当な言葉がありませんでした。そのため、当時の人々が用いていた神々の名を借用しながら、新しい概念を伝えなければならなかったのです。

それはプロテスタント・キリスト教が日本に入ってきたときに、天地創造の神を呼ぶのには、天帝にしようか、創造主にしようか、存在者にしようかなどと迷いながら、結局「神」にしたのと同じような問題があったわけです。「かみ」という言葉が選ばれたのは、良いこ

とであった反面、多くの欠点も指摘されている通りです。

創世記と出エジプト記の始めの部分を読むと、神は、イスラエル民族をご自分の民とするために、そのような「伝道」の苦労をなさっていることが分かります。そして、長い長い時間をかけておられるのにも気付きます。キリストの話に至るまで、とても多くの教育と時間を費やしているのです。

もちろん現在の日本人は、旧約聖書が記された当時のイスラエル人よりは、理解力を持っています。しかし、敵対的態度をむき出しにして対話を拒む、西欧プロテスタントのキリスト論的神学、あるいは救済論的神学を前面に出した伝道では、日本人の心に届くように福音を語ることはできないのです。まず、神をじょうずに紹介しなければなりません。

XII．異教徒のための神学

キリスト教の神学は、当然、キリスト教徒の聖典である新約聖書の解釈から構築された、キリスト教徒のための神学です。それはまた、イスラエル民族に啓示された神の教え、つまり旧約聖書を基盤とした神学です。聖書全巻を通して、異教徒のために書かれた部分、すなわちユダヤ教とキリスト教以外の宗教を、奉じている人々のために書かれたところはありません。

あえて探すと、創世記に少しばかり異色なところがあります。イスラエル民族がまだ神との特殊な契約関係に入っていなかった時代のことが、正確な意味での神の民、イスラエル民族がまだ生まれていなかった頃のことが書かれているからです。イスラエル人は、先祖アブラハムの召しに端を発しますが、エジプトでの奴隷状態から救い出されたことによって、救い出してくださった神との特殊な契約関係に入ったものです。その神との特殊な契約関係に入ったことによって、イスラエル民族は神の民となりました。

アブラハムが召し出されたとき、アブラハムは天地創造の神を正しく理解して信じていたのではありません。周囲の人々と同じように、異教的神観と異教的世界観、そして異教的死生観、異教的価値観を持っていたはずです。それにもかかわらず、神はアブラハムの中にある良い資質をご覧になって、アブラハムにご自分を現し、正しい信仰へと導いてくださったのです。

ところがアブラハムは、すぐさま天地創造の神について正しい理解を持ち、正しい信仰生活を送ることができるようになったのではありません。アブラハムは確かに信仰の父と呼ばれるに相応しい人物でした。しかしそれは、完全な理解や完全な信仰を意味したのではありません。神がご自分につき、また正しい信仰について教育をするためには、アブラハム一人、アブラハム一代だけでは充分でなく、その子イサクと孫やコブ、さらにはひ孫

のヨセフにまで亘る長い間の教育が必要でした。

ヨセフの物語は素晴らしいものですが、天地創造の神を信じる信仰の持ち主としては、はなはだ足りないところが目立ちます。唯一絶対の神に対する信仰が明らかではないのです。まだまだ、天地創造の神に対する信仰には到達しないで、せいぜい、少しばかり大きな神、他の神々よりはちょっとばかり力が強い神、アブラハムの血筋を守り、ヨセフに対して特別な配慮をしてくださる神に過ぎなかったようです。

このように、アブラハムからヨセフに至るおよそ200年間の神の教育は、実にゆったりしたものです。さらにエジプトで奴隷であった400年間ほどが加わっても、イスラエル民族の神信仰は実に曖昧なものだったようです。それは、血族としてのアイデンティティを持つための神、民族の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神であったとしても、それがエジプトの神々、メソポタミヤの神々とどれほど異なった神であるかについては、不透明なのです。

もちろん、神は人類の発祥の時点から「知られない神」であったのではありません。アダムとエバは神を良く知っていました。ただし彼らの神知識は、知的理解としての知識ではなく、体験を通して知る知識でした。幼子が親を知るような知識でした。神は人類の祖先であるこのアダムとエバと、約束を交わしておられます。契約と言う言葉こそ使われていませんが、これは契約と言って間違いではありません。ところが、彼らが罪を犯して神のみ前から追放されてしまったことにより、彼らの神知識はたちまちおぼろげになり、神のいないところで造られた人間社会では、神の知識はますますかすんでしまいました。

神はまたノアにもご自分を現し、彼とも契約を交わしておられます。ノアの神知識がどの程度のものであり、ノアはその知識をどこから得たのかは知りようがありませんが、神からの歩み寄りがあったことは容易に想定することができます。ノアとの契約は人類すべて、あるいは地の上に生きる肉なるものすべてに関わるもので、非常に興味深いものですが、いまの私たちの学びにとってあまり重要ではありません。重要なのは、次のアブラハムに始まる契約です。

神はアブラハムにご自分を啓示され、アブラハムとその子孫を祝福し、彼らを通して地上のすべての民族を祝福すると、約束してくださいました。(創世記１２：１～３)　さらに神は、アブラハムとその子孫にカナンの地を与えると約束してくださいました。(１２：７)また、アブラハムの子孫が星の数ほど多くなるとも、約束してくださいました。(１５：５)この時点では、まだ、これは契約とは呼ばれていませんでしたが、明らかに契約です。アブラハムの子孫にカナンの地を与えるということが、契約として語られたのは、創世記１５章１８節が最初です。ただし、その時に至ってもまだ、神はアブラハムとその子孫がご自分だけを礼拝するという条件を、お語りになってはいません。あるいは他の神々や偶像礼拝についても、何もお示しになってはいません。アブラハムが他の神を礼拝してはならないと、明白には語られていないのです。だだ、それが暗黙の理解となっていたことは

考えられます。

　そういうわけで、アブラハムとその直系の子、孫、ひ孫たちは、アブラハムにご自分を啓示してくださった神に対して忠実であったとしても、直系を外れた子、孫、ひ孫たちの多くは周囲の神々を祀って、これに仕えて行きました。それに対しても、神は何もおっしゃっていないのです。神の関心は、アブラハムの直系の子孫を通して地のすべての民族を祝福することであり、この時点では、直系の子孫だけが大切にされていたと考えられます。

　ところがその直系の孫やコブが、自分の一族の天幕から偶像を取り除いたのは、アブラハムに神が現れてくださってから、およそ１５０年も後の事です。ヤコブ自身は、それまですでに幾度も神の自己顕現を体験していたのですから、これはむしろ驚くべきことです。ヨセフは、最もうるわしい信仰を持っていたようですが、エジプトの宗教の祭司の娘を妻に選びました。モーセも、ミデアン人の宗教の祭司の娘を妻としました。出エジプトを果たして、神との特異な関係に入った後のイスラエルの指導者には、考えることができないものです。

　このように、神との「婚姻」にたとえられる、特殊な契約関係に入る前のイスラエルは、他の宗教に対してかなり寛容だった。と言うより、神は、イスラエル人のご自分に対する曖昧な信仰と、他宗教に対する締りのない態度に、ずいぶん寛容であったと知らなければなりません。

　イスラエル民族の他宗教に対する寛容な態度が、厳しく戒めるようになったのは、出エジプトという出来事に関わってです。神は改めてご自分をモーセに現し、ご自分が「ある」という存在である事をお示しになりましたが、これは、あまりにも理解が難しい自己表現で、モーセにしてもその場では良く意味が分からなかったはずです。ただ分かったのは、燃える芝の中に現れてくださった方が、先祖アブラハム、イサク、ヤコブの神であると言うことであり、この神が、イスラエル民族を救い出してくださると言うことと、モーセがその働きのために信任を受けたと言う事実です。

　この時点にいたってもまだ、イスラエルには、唯一絶対の神と言う概念は与えられていません。この頃のイスラエル民族にとって、神は天地をお造りになった神ではなく、単に、たくさんいる神々の中で最も力強い神、アブラハム、イサク、ヤコブと契約を結んでくださった「彼らの神」に過ぎなかったのです。まだ、この神以外を神としてはならないという、厳しい信仰態度も定まってはいなかったと考えられます。ヤコブの妻ラケルは、すでにヤコブの神を信じてはいたと思われますが、一方では、自分が子どもの頃から馴染んできたであろう、父の偶像テラフィムを隠し持って来た感覚と、あまり変わらなかったのでしょう。

　神とイスラエルの関係をさらに特別とし、この神以外に何ものをも礼拝してはならないという感覚を持たせたのは、出エジプトの後に与えられた十戒とそれに付随した戒律、モ

ーセを通して与えられた契約によるものでした。神は、イスラエルをエジプトの国、奴隷の家から救い出してくださいました。神はその救いを前提条件として、イスラエルにおっしゃったのです。「だから、あなたには、私のほかに、他の神々があってはならない。偶像を造ってはならない。それらを拝んではならない。」　不思議なのは、多くの牧師や聖書学者が十戒について語っていながら、十戒の大前提となる語句、出エジプト記２０章２節を無視していることです。十戒は、この節を除いては正しく理解することはできないのです。十戒そのものが成り立つのはこの節があってこそだからです。

ここにおいて初めて、神はご自分だけを礼拝するように、ご自分だけに仕えるようにとお命じになったのです。「私があなたを救った神だから」という理由です。しかし神はまだ、ご自分だけが神であり、他に神はいないという事実を教えることができませんでした。そのためには、さらに進んだ教育が必要だったのです。それはまず、神という言葉に関わりました。当時の神と言う言葉は、当然、周囲の民族、周辺の人々が使っていた神という言葉です。そこにある概念は、もちろん天地の創造主というような、崇高な、超絶した神の概念ではなく、もっともっと低い、偶像の神々、鳥や獣や這うものや天体の神々でした。神はそのような「汚れのある」「手垢のついた」神という言葉を使用して、ご自分をお示しになる以外に方法が無かったのです。

モーセに対して「私はあるものである」とおっしゃり、崇高な神であることをお示しになったとしても、モーセ自身が理解していなかったのですから、一般のイスラエル人が理解するはずもありませんでした。このような民を教育するために、神はご自分が誰であるかを注意深くお教えになる必要があったのです。それこそが、創世記の天地創造の物語とそれに続く物語が、書かれなければならなかった理由です。天地創造の物語は、天地が造られた経緯や手順を述べたものではありません。ましてや現代科学を満足させるために書かれたものではありません。神はこの物語をもって、「私はこのような神である。すべての神々と異なる神である。すべてのものを無から創造した神、すべてのものを支配している神、時間と空間を超越した神である。同じ神と呼ばれる存在であっても、まったく次元の違う神である」と、宣言なさったのです。

このように神は、ご自分が創造者である事をお示しになりましたが、まだ、他の神々と言われる存在、あるいは不思議や力ある業を行う存在を否定しておられないのです。神が要求なさったことは、頭で唯一の神と理解することではなく、心で、わたしが礼拝する唯一の神は、私を救ってくださったこの神であると決めることだったのです。それはあたかも、「多くの男性の中から選んだ唯一の男性が夫である」というのと同じ理屈でした。「他にも男性はたくさんいるけれど、私は、自分を苦境から救い出してくださった力強く憐れみ深いこの男性を夫と定め、生涯この男性だけに寄り添って行きます」と言う態度を、神はお求めになったのです。

イスラエルの人々が、天地創造の神だけを礼拝するように求められたのは、天地創造という想像を絶するみ業を理解したからではなく、神の救いの力を体験したからです。神に

ついてはまだまだ何も分からなかったのです。聖書が教える信仰は、知的理解による信仰よりも先に、神の力の体験による信仰です。体験のあとに、正しい知的理解が続くのです。天地創造の神が紹介された創世記が、厳密にいつの時点で書き記されたのかは知りませんが、十戒が与えられた後、レビ記が書き記された頃と考えるのが妥当でしょう。

神はまず、イスラエルに対して長い準備期間、基礎教育の時間を置かれました。それから圧倒的な救いの力をもって、イスラエルに救いの体験をお与えになりました。その上で、私だけを礼拝するようにとお命じになったのです。１年や２年の教育期間ではありませんでした。何となくと言うような曖昧な体験ではなく、まさに圧倒的な救いの体験でした。そしてそのあと、天地創造の物語を通しての、非常に明快な神の自己紹介があったのです。

そのような経過をたどって、出エジプトからおよそ４０年後、イスラエルが約束の地に入る直前、今度はモアブの地での契約がありました。これは、出エジプト記２０章に始まるホレブ（シナイ）での契約とは、異なった契約です。内容的には、ただ神のみを礼拝し、神にのみ仕えるならば、神はイスラエルを祝福するという、シナイでの契約を確認する契約ですが、さらにこと細く定められた、確認の契約です。

こうしてイスラエルは神の民として、ただ神のみを礼拝する民族となるようにされたのです。ところが実際は、誰もが知っているように、イスラエルは幾度も幾度も偶像礼拝に走り、神を裏切ってしまいます。その結果、神の厳しい取り扱いを受けなければなりませんでした。神がイスラエル民族に厳しく辛く当たられたのは、このイスラエルの裏切り、背教、宗教的姦淫の罪のためでした。イスラエルが神との契約を破ったのです。イスラエルが、ほかの神々に心を寄せる偶像礼拝から、完全に開放されたのは、バビロンの捕囚を通してだと言われています。７～８００年にわたる偶像礼拝による腐敗と廃頽の後、イスラエルはついに、神が起こしたバビロン帝国の鉄槌を受けて、偶像礼拝を完全に放棄するようになったのです。その後、イスラエルは徹底した一神教民族として存続するようになりました。

バビロンでの「清め」、偶像礼拝からの完全な離別を体験して、およそ５００年。時は新約の時代に流れますが、その頃になるとユダヤ人（イスラエル人）は、旧約の時代の神の律法、特に偶像礼拝の禁止を徹底的に守る民族として、広く知られるようになっていました。キリスト教はこのユダヤ教を温床として芽生えたのです。当然、そこには強烈な反偶像礼拝の機運がありました。パリサイ的な信仰を共有して成長したキリスト教は、モーセの律法を一字一句神の言葉として理解して受け入れ、偶像礼拝を最も憎むべき罪として排斥していました。それは当然、強烈な選民意識、特権意識とつながり、キリストの福音をユダヤ人だけに限定する力となっていたのです。

このような初代のキリスト教が、普遍的福音の真理を理解し、異邦人伝道、すなわち偶像礼拝をしていた人々に福音を伝えるためには、神の特別な取り扱いが必要でした。そこに必要だったのは、パレスチナで育って日常的にヘブル語やアラム語を話す視野の狭いユ

ダヤ人ではなく、異邦人の土地で育ち、異邦人のものの考え方や感じ方だけではなく、異邦人が礼拝する偶像に対してもある程度の理解を持つ人間でした。ただ単なる嫌悪感で目を背け吐き気をもようすナイーブさではなく、それらの空しさを理解し、その背後にある悪霊などの力も良く知りながらも、冷静に見、適切に取り扱うことのできる人間でした。それが、異邦人の世界で育った使徒パウロだったのです。

これは使徒ペテロには無理な仕事だったと思われます。彼も非常に優秀で、神の導きに従って適応性と柔軟性を持って行動できた人物であり、特に異邦人伝道と言う面ではコルネリオの家の人々に対する伝道は突出しています。しかしともすれば、福音をユダヤ人の中に閉じ込めておこうと考える、ユダヤ主義者に妥協しがちだったペテロには、パレスチナを離れた異邦人伝道に関する限り、まだまだは追いつけないところがあったと思われるのです。

ところが神が異邦人宣教のために召し、普遍的福音の真理を明確にお示して理解をさせたパウロも、完全な意味での異邦人宣教と言う面から語ると、まだまだ初心者に過ぎなかったのです。パウロの宣教地は異邦人の土地でした。しかし多くの場合は、離散したイスラエル人が宗教的集まりを持っていた、会堂を拠点とした伝道だったのです。対象の人間の多くはユダヤ人、もしくはユダヤ人化した異邦人、あるいはユダヤ人化するまでには至っていないとしても、ユダヤ人の宗教と習慣に対して尊敬の念を持っていた人々です。

パウロが完全な意味で異邦人宣教に突入したのは、使徒の働きに記されている限り、ルステラでの出来事による証、ピリピでの投獄にともなう伝道、あるいはアテネのアレオパゴスでの説教など、わずか数回のことです。したがって、パウロの神学も完全な意味での異邦人に向けた神学ではありません。つまり、異邦人に理解されるようにと言う意図をもって、構築した神学ではないのです。イスラエル人の旧約聖書の理解を前提としまた基本とした、パリサイ派のキリスト教神学でした。異邦人を念頭において語ったパウロの神学的言葉は、ルステラでの出来事と、アテネのアレオパゴスでの説教に限られます。

このように旧約聖書も新約聖書も、異邦人の宣教を目的とした神学を示していないのです。そこには異邦人のための、あるいは異邦人宣教のための神学の萌芽はあるものの、発展させられてはいないのです。そして、長年西欧で培われ構築されてきたプロテスタント神学には、異邦人のために福音をわかりやすく提示しようとした神学、異邦人の立場と文化とを考慮した神学は不在なのです。

私たちはいま、西欧人のために構築された神学、ある意味で「キリスト教化」した人々を対象とした神学しか知らないのです。そしてその神学を持って、無理やりに完全な異邦人である日本人に宣教しようとしているのです。日本人が理解することができないのは当たり前です。日本人が反感を覚え、敵意さえ感じるのは当然です。そしてそのような神学での宣教が、成功しないのはまさに自然の成り行きです。

私たちはいま、西欧で構築された神学を横において、旧約聖書では、創世記と出エジプト記の十戒の付与にいたる前の部分から、天地創造の神を知らない人々のための神学を発展させ、新約聖書ではパウロの宣教に芽生えがある神学、異邦人のための神学を育てる必要があるのです。